

大白牛車書

建治三年一二月一七日 五六歳

夫法華經第二の卷に云はく「此の宝乗に乗じて直ちに道場に至る」云云。日蓮は建長五年三月二十八日、初めて此の大白牛車の一乘法華の相伝を申し顕はせり。而るに諸宗の人師等雲霞の如くよせ来たり候。中にも真言・浄土・禅宗等、蜂の如く起こりせめたゝかふ。日蓮大白牛車の牛の角最第一なりと申してたゝかふ。両の角は本迹二門の如く、二乗作仏・久遠実成是なり。すでに弘法大師は法華最第一の角を最第三となをし、一念三千・久遠実成・即身成仏は法華に限れり、是をも真言の経にありとなをせり。かゝる謗法の族を責めんとするに、返って彌怨をなし候。譬へば角をなをさんとて、牛をころしたるが如くなりぬべく候ひしかども、いかでさは候べき。

抑此の車と申すは本迹二門の輪を妙法蓮華經の牛にかけ、三界の火宅を生死生死とぐるりぐるりとまはり候ところの車なり。ただ信心のくさびに志のあぶらをさゝせ給ひて、靈山浄土へまいり給ふべし。又心王は牛の如し、生死は両の輪の如し。伝教大師云はく「生死の二法は一心の妙用、有無の二道は本覺の真徳」云云。天台云はく「十如は只是乃至今境は是体」云云。此の文釈能く能く案じ給ふべし。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

十二月十七日

日蓮花押